

SMFアートラボ2011

2011年11月12日 北浦和公園・埼玉県立近代美術館

〈SMFアートラボ〉は、多様なジャンルのアートやアーティストたちと身近にふれあうことができる場です。北浦和公園の空間で、普段着のままの気持ちで、観て、体験して、感じて欲しいという願いから開催されました。

将来の「アートメッセ」を意識した今回は天気にも恵まれて、県内を拠点に活躍するアーティストたちの作品展示やワークショップ、パフォーマンス、そして美術系の大学生たちによる楽しいフリーマーケットなど、多彩な内容となりました。大ケヤキを使った**本田貴侶**さんの展



示は、圧倒的な自然の力強さに霊性感じられました。また**内野務**さんの「トンギワークショップ」では、子どもたちが自分の感性をたよりに工具と格闘しながら自分だけの作品を作り出していました。そこには秋の木かげのひんやり感と日だまりの暖かさを身にまとい、表現に汗を流す小さなアーティストたちの姿がありました。野外での〈SMFアートラボ〉は、身近な場所でアートと出会い、体験を通して表現する喜びを見つける場。若芽がつぼみをつけ、やがて花開く日を夢んでいます。

次に、さまざまなワクワク体験を贈ってくれたアーティストたちとそのプログラムをご紹介します。

【制作・ワークショップ】

本田貴侶「大原の大ケヤキ再生記念造形」(展示とワークショップ) / 内野務「トンギワークショップ」(制作と児童作品展示) / KAPLの仲間たち「『影をつかまえる』ワークショップ」

【パフォーマンス】

近正匡治 / 山尾麻耶 / 生形三郎 / 小西徹郎

【舞踏&ダンス】

山下浩人 / 南弓子 / 村松真衣 & 下亜由美

【俳句×音楽×ダンス】

高橋博夫・笠松泰洋・ダンスユニット〈転々〉(振付：岡野満紀子・榎川真理子)

【作品展示】

堀部宏二+今井伸治 / 出店久夫 / 田中芳 / 小川移山

【学生アートマーケット&ワークショップ】

武蔵野美術大学 / 埼玉大学 / 文教大学 / 東京藝術大学の各有志学生

※敬称略

小原恵利子 (SMF運営委員)

〈アートラボ〉は文字通り、アーティストたちの実験の場でもあります。昨秋、入間市博物館や別所沼公園でのSMF事業で展示したいくつかの作品は、あらためて北浦和公園に置かれることで異なる表情を見せ、新たな魅力を発して訪れた人々を楽しませました。また、これまでのSMFの催しで出会ったアーティストたちがふたたび集うことで実現したパフォーマンス、またこの日初めて出会った展示作品と踊り手の絶妙なコラボレーションなど、多くの発見と出会いが、さらに次へとつながるきっかけとなりました。若い世代を取り込むための「学生アートマーケット」の開催、「その場



でコラボ写真撮影」、アーティストたちと運営参加者全員による「グランドフィナーレ」の実施など、実験装置も予想以上に機能しました。

山尾聖子 (SMF運営委員)

大原の大ケヤキ再生記念造形の展示とワークショップ

与野駅東口、田中仙道にあった樹齢500年ともいわれる大原の大ケヤキが、倒木の危険があるとして2010年5月19日に伐採されました。地域の人びとに愛されてきた、この大ケヤキの思い出を伝えるモニュメントの制作を依頼された彫刻家の**本田貴侶**さんは、旧大原中学校の現場で公開制作にとりかかります。近年、風倒木を素材に空洞性を活かした「風の部屋」シリーズを手がけてきた**本田**さんですが、大原の大ケヤキはきわめて硬い木質で腐食によって傷んだ部分も多く、主にチェーンソーを使った制作には何倍もの苦労があったといいます。途中、体調を崩しての入院も乗り越え、およそ1年半を経て、2011年11月に完成し、今回の〈SMFアートラボ〉でお披露目することになりました。

「大ケヤキに宿る女神」のコンセプトから、側面には大ケヤキのはらむ動勢を活かして、地母神像と母を追う子どもたちの姿が浮き彫りにされています。タテ・ヨコ約2m、重さ約1.5トンのこの堂々たるモニュメントは「風の記憶」と名付けられました。古樹ケヤキ対策委員会のみなさんの尽力で実現した展示とご神木の木端を使ったワークショップに大勢の人が訪れて、モニュメントの威容に目をみはっていました。

中村誠 (SMF事務局)

ドキドキワクワクのトンギワークショップ

内野先生の「トンギワークショップ」には、2歳から14歳までの子どもたちが次つぎに集まり、休む間もないほどの大盛況でした。小さい子どもたちは棒に絵の具を塗ってつけてゆく「アート・スクランブル」コースに、また小学生以上はのこぎりや電ノコで木を切り、電動ドリルを使って本格的なイスを作る「マイ・チェ



アーク」コースに取り組みました。世界にひとつのイスを作り上げた満足そうな笑顔はどれも輝いていましたが、3・4歳の子どもたちまで「自分のイスを作りたい！」と挑戦する意欲的な姿には驚きました。電ノコの上で跳ねる板に軽く手を添えながら、講師の**内野務**さんは「このブルブル震える感覚を味わわせたかったんだ」とおっしゃっていました。今回のワークショップでは作品の完成よりも、慣れない道具をあつかって夢中でものづくりをする体験とおして、子どもたちを心からドキドキワクワクさせることができたのではないかと感じています。

森綾子 (SMF協力委員)

アートの実験場の可能性

〈SMFアートラボ〉は、その名のとおり表現活動の実験場。今回、KAPL(コシガヤアートポイント・ラボ)の20名あまりの仲間たちは、次のような4つのワークショップで参加しました。

1 「影をつかまえる—フォトグラムWS」



- (感光紙で北浦和公園の影を写しとる)
- 2 「分身記念写真を撮ろう！」
(長時間露光撮影で記念写真を撮る)
- 3 「お絵かきーズ」
(3人の絵描きによる3種の似顔絵を描く)
- 4 「石膏で写し取るカタチ」
(北浦和公園の落ち葉などを石膏でかたどる)

表現活動には、自分の表現をとことん深めて発表する方法がある一方、「こんなことができたらしらうな」「参加する人々と関わりながら制作したい」という動機にもとづく方法があります。自分の中ではまだ未知のものや不確定なものを展開し、その中で表現に参加してくれる人や観てくれる人たちの反応を実感しながら制作していくやり方です。後者を気軽に展開できる場はまだまだ少ないのですが、〈SMFアートラボ〉では公園を訪れる人々を巻き込みながら、表現活動を展開することができました。こうした場や機会があることで、表現活動の幅を広げることができると実感しました。

浅見俊哉 (SMF協力委員)

学生にとってのアートラボ

学生にとって〈SMFアートラボ〉は、ドキドキ



ワクワクする実験場です。大学祭でも学生の作品を学外の方がたに見ていただく機会があり、作品を見ることが目的で多くの方が来場されます。しかし、この〈アートラボ〉はそうではありません。まちの人、公園を通りかかった人、美術に興味がある人やない人など、さまざまな方がたの往来する、まさに社会の中に作品を出すことができます。似顔絵コーナーを設けてお客さんと向き合う学生、自分で描いたオリジナルの漫画を展示する学生、子どもたちを呼び込んでキャンドルスタンドを作るワークショップをおこなう学生、はたまた不思議な楽器を演奏する学生など、表現手法はみんな違います。学生たちはそれぞれの思いを作品に込め、多くの方がたに見ていただくことができました。うれしい感想をもらった学生もいれば、きびしいご意見をいただいた学生もいました。しかし、学生たちはそんなきびしい意見についても、「言ってもらってよかった。もっと、これからがんばる」と今後の制作への活力をいただいたようです。学生にとって〈アートラボ〉は、社会を直接感じるができる貴重な場でした。

齋藤はるか (SMF協力委員)

